

## 特集にあたって 東方政策研究プロジェクト

山本 博之

今年 2012 年は、マレーシアが東方政策(ルックイースト政策)を実施して 30 周年にあたる。東方政策とは、「日本と韓国の成功と発展の秘訣が国民の労働倫理、学習・勤労意欲、道徳、経営能力等にあるとして、両国からそうした要素を学び、マレーシアの経済社会の発展と産業基盤の確立に寄与させようとするマレーシア政府の政策」である。この 30 年間にのべ約 1 万 5000 人のマレーシア人が日本に派遣され、高等教育機関の専門課程で学んだり、産業・ビジネス研修を受けたりしてきた。また、2011 年には東方政策の集大成としてマレーシアにマレーシア日本国際工科院(MJIIT)が開設された。

東方政策が進められてきた 30 年間、マレーシアは著しい経済発展を遂げ、同政策を取り巻く環境は大きく変わりつつある。30 周年を機に、マレーシアと日本の政策当局者やビジネス界は新しい時代に応じた東方政策のあり方について模索を始めつつあり、研究者に対しても政策提言を求めている。しかし、外務省が行った委嘱調査や日本人とマレーシア人によるいくつかの研究があるにすぎず、東方政策研究は、重要だと位置づけられていることに比して、その蓄積の少なさが目立つ。

このような状況で、日本マレーシア学会(JAMS)では、2012 年に東方政策を検討する研究プロジェクトを組織し、東方政策の成果と意義を検討してきた。この研究プロジェクトには JAMS 運営委員をはじめとする多くの会員が関わっているが、日本の外務省との橋渡し役を担い、研究プロジェクトでも中心的な役割を担って

いるのが、JAMS 社会連携ウイングを担当する運営委員の川端隆史会員である。川端会員は外務省在職中から JAMS の活動に積極的に参加し、外交と研究の連携の必要性を訴えてきた。川端会員のもと、JAMS 社会連携ウイングでは外務省員と地域研究者の共同研究の組織化を進め、また、一般公開のセミナーを組織し、研究成果を社会に積極的に還元する方法を模索してきた。東方政策 30 周年を迎えるにあたり、JAMS では同政策を学術的に評価するだけでなく、研究成果をもとに外務省を通じてマレーシア政府に提言することを視野に入れて研究を進めているが、これは研究の社会還元(社会連携)を強く意識してきた JAMS の活動の延長上にあるものである。

\*

東方政策に関する研究は、JAMS の東方政策研究プロジェクトを母体とし、地域研究コンソーシアム(JCAS)社会連携プロジェクト「地域研究と外交実践の連携プロジェクト」(代表:川端隆史、期間:2011~2012 年度)や京都大学東南アジア研究所の公募共同研究「教育・研究交流を通じた東アジアにおける産官学ネットワークの社会的影響の評価—東方政策の 30 年を振り返って」(代表:金子芳樹、期間:2012~2013 年度)などの複数の研究プロジェクトによって進められている。

これらの研究プロジェクトでは、2012 年には国内外の学会やシンポジウムを通じて中間報告を行い、東方政策に関する検討を重ねてきた。

2012 年 6 月 23 日には、マレーシアのプトラジ

ヤで東方政策 30 周年を記念する国際シンポジウムが開催された。JAMSからは、シニア研究者の部に2名、若手研究者の部に5名の会員が参加し、それぞれ東方政策に関する研究発表を行った。各報告者の報告や議論の内容は本特集の他の記事にゆずるが、ここでは若手研究者の活躍を特筆しておきたい。シニア世代のマレーシア研究者の多くは英語能力が高く、研究発表も質疑応答も英語で行う(マレー語は挨拶程度にとどめる)のに対し、若手世代のマレーシア研究者は発表も質疑も英語とマレー語のどちらでも行えることが当たり前となっている様子が見えられた。このシンポジウムでも、マハティール元首相の基調講演に対してフロアから川端隆史会員が流暢なマレー語で質問し、会場の参加者を驚かせていた。シンポジウムの様子は翌日の全国紙『スター』紙で大きく報じられ、そこでも川端会員をはじめとするJAMSの若手研究者が中心に取り上げられていた<sup>1</sup>。シニア世代と若手世代という分け方は大雑把なものであり、また、どちらか一方がより優れていると言うつもりはないが、このシンポジウムに参加した若手研究者のコミュニケーション能力の高さを特筆しておきたい。

その後、2012年10月14日には関西学院大学でアジア政経学会の全国大会が開催され、東方政策研究プロジェクトが組織したパネルが分科会において、マレーシア以外の地域を専門とする政治経済の研究者を交えて東方政策の達成と意義が検討された。

また、2012年12月15、16日に立教大学で開催されるJAMS研究大会では、東方政策30周年をテーマとする特別シンポジウムを開催する

予定であり、これまでの研究を踏まえて学会全体で東方政策について検討する機会となる。

本特集では、上述の2012年6月の国際シンポジウムおよび2012年10月のアジア政経学会全国大会の分科会について、報告と議論の内容を紹介する。これは、JAMSの東方政策研究プロジェクトによる研究内容の紹介であるとともに、2012年12月に行われるJAMS研究大会の特別シンポジウムにおける議論の材料を提供するという意味も込められている。

東方政策といったとき、「政策」と名前が付きながらも、人材育成のための日本留学にとどまらず、実に多岐にわたる領域のものごとを含めて捉えられることが多い。厳密に「政策」を定義して分析しようとする立場ではこの曖昧さは頭を悩ませる原因となるかもしれないが、「政策」という言葉に過度にとらわれることなく、融通無碍とさえ言える東方政策の実態をさまざまな角度から把握しようとするを通じて、東方政策の到達や意義、そしてそれを30年続けてきたマレーシア社会の特性を考えることができるだろう。この特集を通じて、自身の専門や関心は政策研究と直接関わらないと思う人を含めて、より多くの方々に東方政策の到達と意義をさまざまな角度から検討していただければと思う。

<sup>1</sup> <http://thestar.com.my/news/story.asp?file=/2012/6/24/nation/11541284&sec=nation>